

基礎看護学実習 I の病院実習での学びと課題

山本 智恵子*・土井 英子・杉本 幸枝・木元 歩美

基礎看護学

(2012年11月28日受理)

基礎看護学実習 I の病院実習で学んだ内容を分析し、実習の効果や今後の課題を明らかにすることを目的とした。2012年6月初旬に行われた病院実習終了後に、実習の学びを学生1名につき5つずつ記述したものをデータとし、内容分析を行った。その結果、【看護の対象と看護師との関係】【個別性の尊重】【医療安全の重要性】【チーム医療の重要性】【知識・技術の必要性】【療養環境の工夫】【看護師の行動】【療養生活の理解】【命の尊重】【看護師の魅力】の10カテゴリーが抽出された。病院実習の目的である“看護師の役割の理解”についての記述が多いが、“患者の生活の理解”についての記述が少なかったため、学生に対して患者の療養生活への意識付けする必要性が示唆された。

(キーワード)基礎看護学実習, 早期実習, 病院実習, 内容分析

はじめに

基礎看護学教育において、初学者である学生が早期に臨地実習を行うことの効果は、学生の内発的動機づけによる学習意欲の向上につながり¹⁾、今後の学習課題を認識することができる²⁾ことなどの有効性が多く報告されている。また、看護学生が看護師に同行し看護実践場面を見学する実習については、学生が看護師を学習モデルとして捉えること³⁾や病院組織の中での看護師の役割についての学習効果がある⁴⁾ことなどが報告されている。筆者らも、基礎看護学1日病院実習での効果や課題を検討し⁵⁾⁶⁾、基礎看護学実習の科目に位置づける必要性を明確にした。その後10年以上が経過し、医療が大きく変革している中で学生の学びを再検討するため、本研究は大学における基礎看護学実習 I の病院実習での学生の学びを分析した。病院実習の学習効果を明らかにし、学生の基礎看護学実習 I における実習目的・目標の到達につながるよう、今後の指導方法を検討したので報告する。

I. 研究目的

基礎看護学実習 I の病院実習で学んだ内容を分析し、実習の効果や今後の課題を明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究対象：A 大学看護学部において、2012年度に基礎看護学実習 I を履修した64名
2. データ収集方法：基礎看護学実習 I (病院実習) 終了後、学生が病院実習での学びを5つずつ記述した。実習のまとめの会において全員でその学びを共有した。本研究では、学生が記述した学びの内容をデータとした。
3. 分析方法：64名の基礎看護学実習 I での学びの意味を汲み取りながら一文一意味になるようにコードを抽出した。抽出した内容を類似した意味内容ごとに分類し、質的に内容分析を行った。分析については、研究者間で繰り返し検討した。
4. 倫理的配慮：まとめの会で記述した学びを研究資料とするにあたり、基礎看護学 I (病院実習) の評価終了後、研究対象者に研究の主旨(研究目的・方法)、匿名性、研究協力は自由意志によるものとし、成績評価には一切影響しないこと、研究協力しないことで不利益を受けることはないことを文書と口頭で説明し、同意撤回書を配布した。同意撤回書の提出がなかったことで協力が得られたものとした。

III. 基礎看護学実習 I の概要

基礎看護学実習 I は1年次に通年で実施される。6月初旬に病院実習1日、夏期休業期間に在宅実習2日、11月初旬に施設実習1日の計4日間の実習を行っている。各

*連絡先：山本智恵子 新見公立大学 看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

実習の目的として、病院実習は『患者の生活や看護師の役割の理解』、在宅実習では『異世代とのコミュニケーション能力の向上』、施設実習では『心身障害者(児)の生活や対象の理解』としている。基礎看護学実習Ⅰの目標及び実習方法を以下に示す。

<目標>

1. 対象者と直接的・間接的に関わることにより、看護の対象者の生活状況を理解する。
2. 対象者の生活を取り巻く環境について理解する。
3. 看護の場における対象者と看護者の援助関係について理解する。
4. 病院・施設・家庭の機能について理解する。
5. 看護者としての基本的態度を養う。

<基礎看護学実習Ⅰ(病院実習)の方法>

B病院・C病院の各病棟責任者及び実習指導者に実習目的・目標・実習方法・科目の進捗状況を説明した。実習日は6月初旬の1日とし、学生64名は各病院32名ずつ、各病棟2~3名ずつに分かれて27病棟で実習を行った。病棟看護師1名に対して学生1名が行動を共にし、実習を行った。午後には、学生が患者と直接関わる時間を20分程度持った。

IV. 結果

64名の学びを分析した結果、312のコードが抽出された。そして、コードの類似している内容を25サブカテゴリーに分類した。さらに、【看護の対象と看護師との関係】【個別性の尊重】【医療安全の重要性】【チーム医療の重要性】【知識・技術の必要性】【療養環境の工夫】【看護師の行動】【療養生活の理解】【命の尊重】【看護師の魅力】の10カテゴリーに類型化した(表1)。以下、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは[], コードは< >, データは「 」で示す。

最もコード数が多かったカテゴリーは、【看護の対象と看護師との関係】であり、82コード、5サブカテゴリーで構成された。学生は、<腰を落として患者よりも目線を下げて話す>、<ノンバーバルコミュニケーションの大切さ>から、[看護師のコミュニケーションの取り方]を学んでいた。また、看護師と患者の会話から<患者の話が聴くことが大事>という[傾聴の大切さ]に気づいていた。そして、看護師と行動を共にしている中で、<患者が使いやすい状態を常に考えていた>ことや<看護師のこまめな声かけが患者に安心感を与えていた>ことから[患者への気遣い]を感じ取っていた。<患者の立場に立って、気持ちを理解すること>や<患者が頑張っていることを認める>ことの大切さを感じ、[患者の気持ちの理解]について学んでいた。そして、患者だけでなく[家族も看護の対象]であることに気づくことができていた。こ

れら5つのサブカテゴリーを【看護の対象と看護師との関係】とした。

次にコード数が多かったカテゴリーは、【個別性の尊重】であり、63コード、3サブカテゴリーで構成されていた。ケアを見学する中で<セルフケア概念が医療現場で活用されていた>という学びから、[医療現場でのセルフケア概念の活用]を実感していた。また、<受け持ち患者の健康状態を細かくチェックしていた>、<患者に触れて見て、全ての情報から患者のニーズを考える>ように、[患者のニーズをとらえる情報収集]の大切さを学んでいた。そして、<患者は病状や生活状況が異なり、個性が大切>や<患者中心で看護することを常に意識することが大切>という[患者の個別性]を意識する必要性を学んでいた。これら3つのサブカテゴリーを【個別性の尊重】とした。

次にコード数が多かったカテゴリーは、【医療安全の重要性】であり、43コード、4サブカテゴリーで構成された。実際に<点滴の確認がバーコードで行われていた>ことや<他の看護師とダブルチェックを行っていた>ことを間近で見ることによって[患者間違いを起こさない工夫]がされていることを学んでいた。また、看護師が<エプロン・マスクを一回一回換え、手洗いもこまめにしていた>こと、<物品ごとに洗浄・消毒の方法を変え、感染予防を行っていた>ことから[看護師が行う感染予防の実際]を見る機会があった。そして、<転倒アセスメントを行い、危険度を1~3の段階で評価していた>ことや実際にベッド柵やナースコールを使用した工夫を見ることによって[転倒・転落を防ぐ工夫]を学んでいた。さらに、[インシデントレポートを活用した再発防止]があることを教えてもらった学生もみられた。これら4つのサブカテゴリーを【医療安全の重要性】とした。

次にコード数が多かったカテゴリーは、【チーム医療の重要性】であり、36コード、2サブカテゴリーで構成された。薬剤師・栄養士・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・看護助手などの職種や緩和ケアチームのことが学生の記述にあり、<一人の患者に対して、多職種の協力がある>という[チーム医療の実際]を学んでいた。その学びの中で、「患児や親、看護師も含め、みんなを笑顔にする大切な役割がある臨床道化師の存在を知った」という体験もあった。そして、実際に<チームナーシング、受持制で看護していた>ことや<看護師同士で情報交換をよくしていた>場面を見ることで[看護師同士の患者情報の共有]の大切さを学んでいた。これら2つのサブカテゴリーを【チーム医療の重要性】とした。

次にコード数が多かったカテゴリーは、【知識・技術の必要性】であり、29コード、3サブカテゴリーで構成された。<患者の容体が変わるので、看護師には様々な知識が必要>や<小児科の看護師には専門的な知識や技術が

表1 学生が基礎看護学実習Ⅰ(病院実習)で学んだ内容

主なコード	サブカテゴリー	カテゴリー
腰を落として患者よりも視線を下げて話す ノンバーバルコミュニケーションの大切さ	看護師のコミュニケーションの取り方(38)	看護の対象と 看護師との関係
患者とコミュニケーションをとる時、患者の話を聴くことが大事	傾聴の大切さ(10)	
ベッド周りを整え、患者が使いやすい状態を常に考えていた 看護師のこまめな声かけが患者に安心感を与えていた	患者への気遣い(12)	
患者の立場に立って、気持ちを理解することが大切 患者が頑張っていることを認めることが大事	患者の気持ちの理解(15)	
患者だけではなく家族も看護の対象になり、配慮が必要	家族も看護の対象(7)	
セルフケア概念が医療現場で活用されていた	医療現場でのセルフケア概念の活用(9)	個別性の尊重
受け持ち患者の健康状態を細かくチェックしていた 患者に触れて見て、全ての情報から患者のニーズを考える	患者のニーズをとらえる情報収集(24)	
患者の病状や生活状況が異なり、個別性が大切 患者中心で看護することを常に意識することが大切	患者の個別性(30)	
点滴の確認がバーコードで行われていた 他の看護師とダブルチェックを行っていた	患者間違いを 起こさない工夫(25)	
エプロン・マスクを一回一回換え、手洗いもこまめにしていた 物品ごとに洗浄・消毒の方法を変え、感染予防を行っていた	看護師が行う 感染予防の実際(12)	
転倒アセスメントを行い、危険度を1-3の段階で評価していた 転倒・転落を防ぐ工夫がされていた	転倒・転落を防ぐ 工夫(4)	医療安全の 重要性
インシデントレポートで報告し、改善策を話し合うことを知った	インシデントレポートを活用した再発防止(2)	チーム医療の 重要性
1人の患者に対して、多職種の協力がある 余命告知判断のための倫理カンファレンスがあった	チーム医療の実際(20)	
チームナーシング、受持制で看護していた 看護師同士で情報交換をよくしていた	看護師同士の 患者情報の共有(16)	
患者の容体が変わるので、看護師には様々な知識が必要 小児科の看護師には専門的な知識や技術が必要である	様々な知識・技術の 必要性(15)	
看護師の行う援助は演習と違い、患者の状態に配慮しながら行わないといけない	看護師の援助と 演習との相違(6)	
今の学習は基礎なので、どんな援助でも応用が効く	基礎学習の重要性(8)	療養環境の工夫
ホテルロビーのような雰囲気での病院の重苦しい感じはなかった 視力低下の患者のために病棟内が工夫されていた	病院内の環境の整備(13)	
病室には大きな窓があり、明るい雰囲気だった ナースコールの種類が患者ごとに選択されていた	病室環境の工夫(13)	
看護師はてきぱきとした動作で援助を行っていた 看護師は時間に気をつけながら行動をしていた	看護師の時間を考慮 した行動(12)	
電子カルテで情報管理、看護師は電子カルテに記録していた クリティカルパスを使って円滑に患者へケアをしていた	電子カルテやクリティカル パスを使っての 看護実践(5)	
患者の一人部屋での食事は寂しく、楽しくないだろうと感じた 入院生活は1日が長く感じると思った	療養生活の長さ(3)	療養生活の理解
患者は不安を抱えていながらも前向きに過ごしている 患者は自分の病気の状態について勉強し、理解していた	療養生活を送っている患 者の現状(7)	
看護の仕事は人とふれあい(生)を感じるとともに(死)も感じる	人間の命の尊さ(3)	命の尊重
患者と喜びを共有し、それを実感できることが看護師の魅力 看護師は笑顔で明るく誰にでも優しく接していて、輝いていた	看護師の魅力(3)	看護師の魅力

*サブカテゴリー欄の()はコード数

必要である>など[様々な知識・技術の必要性]を感じていた。また、実際にケアに参加した時に、<看護師の行う援助は演習と違い、患者の状態に配慮しながら行わないといけない>と[看護師の援助と演習との相違]について感じ、<今の学習は基礎なので、どんな援助でも応用が効く>などの[基礎学習の重要性]に気づいた学生もいた。これら3サブカテゴリーを【知識・技術の必要性】とした。

次にコード数が多かったカテゴリーは、【療養環境の工夫】であり、26コード、2サブカテゴリーで構成された。病院内の見学を通し、<ホテルロビーのような雰囲気や病院の重苦しい感じではなかった>や<視力低下の患者のために病棟内が工夫されていた>という病棟内の様子から[病院内の環境の整備]の重要性について感じていた。さらに、<病室には大きな窓があり、明るい雰囲気だった>、<ナースコールの種類が患者ごとに選択されていた>ことを知り、[病室環境の工夫]を学んでいた。これら2サブカテゴリーを【療養環境の工夫】とした。

次にコード数が多かったカテゴリーは、【看護師の行動】であり、17コード、2サブカテゴリーで構成された。看護師と共に行動したことから<きばきとした動作で援助を行っていた>や<時間に気をつけながら行動をしていた>ことを感じ、[看護師の時間を考慮した行動]を体験していた。また、<電子カルテで情報管理され、看護師は電子カルテに記録していた>や<クリティカルパスを使って円滑に患者へケアをしていた>ことから[電子カルテやクリティカルパスを使っての看護実践]を感じていた。これら2サブカテゴリーを【看護師の行動】とした。

次にコード数が多かったカテゴリーは、【療養生活の理解】であり、10コード、2サブカテゴリーで構成された。<患者の一人部屋での食事は寂しく、楽しくないだろうと感じた><入院生活は1日が長く感じると思った>と患者の[療養生活の長さ]を感じ、<患者は不安を抱えていながらも前向きに過ごしている>ことや<患者は自分の病気の状態について勉強し、理解していた>ことから[療養生活を送っている患者の現状]を知ることができていた。これら2サブカテゴリーを【療養生活の理解】とした。

そして、3コードと少ないが【命の尊重】[看護師の魅力]を学んだ学生がいた。<看護の仕事は人とふれあい(生)を感じるとともに(死)も感じる>のように[人間の命の尊さ]を感じ、【命の尊重】について学んでいた。そして、<患者と喜びを共有し、それを実感できることが看護師の魅力>や<看護師は笑顔で明るく誰にでも優しく接していて、輝いていた>ように【看護師の魅力】を感じた学生がいた。

V. 考察

1. 基礎看護学実習 I の学び

基礎看護学実習 I の目標『①対象者と直接的・間接的に関わることにより、看護の対象者の生活状況を理解する』については、【療養生活の理解】に学びが示されている。[療養生活の長さ]の学びに「病室がカーテンで区切られていて、患者同士の会話はあまりないようだった」という学生の記述もみられ、実際に臨床でしか感じることができないことを学んでいた。また、[療養生活を送っている患者の現状]では、「医師からは治らないと告知されたが、「前向きに生きたい」と笑顔で言っていた」という記述のように、患者と直接関わり、患者の気持ちを聞き出すことができていた。2001年度より午後の20分程度で患者と直接かかわる時間を設けるようにしているが、このことが目標①の学びにつながっていると考える。

目標『②対象者の生活を取り巻く環境について理解する』については、【療養環境の工夫】によって示されている。[病院内の環境の整備]では、整形外科や眼科病棟の設備の工夫についての学びがあった。学生は2病院・27病棟に分かれて実習が行われているので、実習後のまとめの会で各病院、病棟の特徴を共有することによって、対象者の生活を取り巻く環境についての理解が深まっていると考えられる。

目標『③看護の場における対象者と看護者の援助関係について理解する』については、【看護の対象と看護師との関係】【個別性の尊重】【知識・技術の必要性】【看護師の行動】によって学びが示されていた。【看護の対象と看護師との関係】の中で、[家族も看護の対象]には、「入院している子供の親も看護対象になる。小児看護＝家族看護」という記述があり、今回初めて小児科病棟の実習からの学びである。そして、[看護師のコミュニケーションの取り方] [傾聴の大切さ]の学びのように、看護師と一緒に行動することで実際の会話を聞き、看護師の身ぶり、態度、姿勢、表情まで注意深く観察していた。さらに看護師と患者の距離感を感じ取れており、学生自らコミュニケーションのコツを学んでいる。この2つのサブカテゴリーは48コードと多く、学生の関心の高さが示されていた。さらに、[患者への気遣い] [患者の気持ちの理解]の学びは、「患者の立場に立って考える」こと、「患者中心の看護」という学生の記述があり、看護の本質ともいえるケアリングの実践を1日という時間の限られた中で看護師から学んでいる。また、【個別性の尊重】では[医療現場でのセルフケア概念の活用]が学ばれており、臨床で実際に行われていることが大学の授業で学んだ理論であることに気づき、今後の学習意欲にもつながると期待できる。【知識・技術の必要性】の学びの中で、実際に清拭、足浴、車いすの移送、ベッドメイキングなどの援助技術を実践

し、[看護師の援助と演習との相違]を感じると同時に、今学んでいる大学での援助技術が基本となり、応用力が必要と感じている。しかし、「自分達が教科書を見て学んでいるものは、実際の現場で役に立たないものもある」という記述もあり、多様な臨床での価値観を具体的な看護場面を引き出しケース検討していく必要がある。以上のように学生はこの実習で看護師と行動することによって、病院における看護の対象者について学び、看護師が学習モデルとなり、対象者との援助関係の理解につながっている。また、この目標に関する学びが最も多くなっており、看護を学び始めた学生にとって看護の意義について考えることの意味は大きいと考える。

目標『④病院・施設・家庭の機能について理解する』については、【医療安全の重要性】【チーム医療の重要性】で学びを示している。【医療安全の重要性】では、看護師同士のダブルチェック、さらに、2病院ともPDA（携帯情報端末）を使用している誤薬防止を行っており、医療安全に関する学びが多かった。この実際に見た経験は、今後の学習でも活かされていくであろう。【チーム医療の重要性】では、カンファレンス場面の参加によって1人の患者を取り巻く他職種との連携・協働の理解につながり、看護師同士の情報の共有場面を見ることによって、チームナーシングの理解につながっている。患者のQOL（Quality of Life）を満ちし、より質の高い生活が営めるように医療者がどのように関わっているかを短い時間の実習において、垣間見ることができるといえる。これらの学びにより、病院の機能については、医療が行われている現場を見ることが学生の学びに大きな影響を与えていると考える。

目標『⑤看護者としての基本的態度を養う』については、【命の尊重】【看護の魅力】で学びが示されている。【命の尊重】については、コード数が3つと少ないが、まとめの会で学生同士が共有することができ、この学びをきっかけにして個々の死生観につながっていくと考える。また、【看護者の魅力】についての学びは、今後の学習の方向づけになっていくと考えられる。

以上のように、学生の学びをまとめることより、基礎看護学実習Ⅰの目標に沿った学びであった。また、実習終了後に2つの病院での学びを共有することによって、目標の到達に近づいたと考える。ベナー⁷⁾は「経験的学習は、いつでも誰にでも起こるものではなく、経験を明確に表現し振り返る機会が意図的に計画されている環境が必要である」と述べており、学生の体験や疑問を明確に表現させる時間をもつことが経験的学習につながっていくと考えられる。また、学生に臨地実習での経験を教室での学びに活用するように指導することは、学生に情報をどのように活用すればよいのかを想像させるのに役立つ⁸⁾と考えられる。入学後の早期に実習を行い、その経験を学内

での授業に活用していくことで、実習後の学習と統合しやすくなり、早期に病院実習をする意義につながると考える。

また、病院実習の目的である『患者の生活や看護師の役割の理解』について記述数からみると、『看護師の役割の理解』は多くの記述が抽出された。しかし、『患者の生活の理解』については、記述が少なかった。看護学生として初めて臨床現場に入り看護師と行動を共にすることで、看護師の行動に多く学生の関心が注がれていたことがうかがわれる。患者の療養生活についての記述の少ないことは今後の課題といえよう。今後は、患者の療養生活への意識付けができるように、オリエンテーションで学生に問題提起をしていく必要がある。

2. 前回の先行研究と比較しての相違

前回の報告時にはなかった学びとして、【医療安全の重要性】がある。前回の報告は2001年であり、それから11年が経過している。その間に、IT社会の到来に伴い1999年厚生労働省から出された『診療録等の電子媒体による保存について』⁹⁾の通知により病院の電子カルテによる患者情報の電子化へと変化している。また、医療安全の意識も高まり、リスクマネジメントが注目されるようになった。このような社会情勢もあり、前回は報告がない医療安全について学生が学んでいることがわかる。この【医療安全の重要性】は、看護を学び始めた学生にとって安全への意識付けとなり、看護師の役割と責任感を形成していくものにつながると考えられる。

そして、【チーム医療の重要性】については、前回の報告では1コードであったが、今回は36コードと多くの学生が学んでいた。患者中心の医療が行われ、チーム医療の重要性が認識されてきた近年、一日の時間の限られた中でも看護師同士の連携だけでなく他職種間の連携を目にする場面が多くあったことがうかがえる。

このように、学生の学びを再検討したことで、実習方法がほぼ同じであっても、医療の発展に伴い、学生の学びは大きく変化していることが明らかとなった。

文献

- 1) 高橋清美・中野栄子：学生が抱く早期看護実習Ⅰの主観的満足感—内発的動機づけによる実習効果—。福岡県立大学看護学部紀要, 1, 29-39, 2003.
- 2) 桜井礼子・山口真由美：看護教育における初期体験実習の経験と意義.大分看護科学研究, 1 (1), 20-26, 1999.
- 3) 鯉坂由紀・安斎三枝子：学習モデルとしての『看護師の行動』についての検討 第2報—1年次基礎看護学実習まとめレポートの分析より—。京都市立看護短期大

- 学紀要, 31, 161-169, 2006.
- 4) 清水暁美・荒井葉子：基礎看護学実習 I で学生が学んだ看護師の役割. 看護・保健科学研究誌, 9(1), 34-40, 2009.
- 5) 杉本幸枝・土井英子・石本傳江：基礎看護学一日実習における効果と課題－学生の実習記録の内容分析を通して－. 新見公立短期大学紀要, 19, 137-148, 1998.
- 6) 小野晴子・杉本幸枝・土井英子他：基礎看護学一日実習の効果と位置づけの検討－実習記録の内容分析を通して (Part II)－. 新見公立短期大学紀要, 22, 53-63, 2001.
- 7) パトリシア ベナー他, 早野 ZITTO 真佐子訳：ベナーナースを育てる. 医学書院, 東京, 61, 2011.
- 8) 前掲書 5) 189-190.
- 9) 厚生労働省ホームページ, 診療録等の電子媒体による保存について[インターネット On line], [2011年9月] http://www1.mhlw.go.jp/houdou/1104/h0423-1_10.html, 1999.

Learning and issues from the hospital training in Basic Nursing Practice I

Chieko YAMAMOTO, Hideko DOI, Yukie SUGIMOTO, Ayumi KIMOTO
Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

This study aimed to analyze learning during the hospital training in Basic Nursing Practice I in order to identify the effect of the training as well as issues to be addressed in the future. After the hospital training conducted early June 2012, each of the students who participated in the training was requested to describe approximately five points they learned from the training and the analysis was conducted based on the responses from the students. As a result, the following ten categories were identified; 1. Relationship between those who are nursed and nurses 2. Respect for individuality 3. Importance of medical safety 4. Importance of team medicine 5. Necessity of knowledge and technical skills 6. Innovative idea for environment of medical treatment 7. Behavior of nurse 8. Understanding of life under medical treatment 9. Respect for life and 10. Attractiveness of nurse. Many descriptions referred to “understanding of the role of nurse”, which was the purpose of the hospital training. There were less descriptions regarding “understanding of the life of patient”, thus it is necessary to raise students’ awareness regarding the patients’ life under medical treatment.

Keywords: Basic nursing Practice I, Early exposure, the hospital training, content analysis